



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	チュルク諸語における副動詞の諸相と、中央アジアのチュルク諸語における V-(I)p bol-
Author(s)	日高, 晋介; HIDAKA, Shinsuke
Citation	北方言語研究, 14, 1-21
Issue Date	2024-03-20
DOI	https://doi.org/10.14943/110525
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/92096
Type	departmental bulletin paper
File Information	01_Hidaka.pdf



[特集 副動詞]

チュルク諸語における副動詞の諸相と、
中央アジアのチュルク諸語における *V-(I)p bol-*

日高 晋介

(日本学術振興会 PD／新潟大学)

キーワード：副動詞、中央アジア、チュルク諸語、可能性、意味領域地図

I. チュルク諸語における副動詞の諸相

1. はじめに

本稿は、第 I 部「チュルク諸語における副動詞の諸相」と第 II 部「中央アジアのチュルク諸語における *V-(I)p bol-*」に分かれている。第 I 部では、言語類型論における副動詞の定義・用法の分類と、それらの整理を行ったうえで、本特集論文の論点を述べる。なお、第 I 部の例文のグロス・英訳は先行研究に従っている。例文番号・日本語訳・太字などの文字飾りはことわりのない限り筆者によるものである。

2. 言語類型論における副動詞の定義・用法の分類

本節では、まず、副動詞の言語類型論的研究で多く参照されている Haspelmath (1995) と Nedjalkov (1995) による定義と分類について述べる。次に、Johanson (1995) によるチュルク諸語における副動詞の分類について述べる。最後に、Nedjalkov (1995) と Johanson (1995) による分類と対比して自身による副動詞の分類を示した江畑 (2023) について述べる。

副動詞 (converb) という術語は、Van der Auwera (1998: 273) によれば、Ramstedt (1903) によって提唱されたという。近年では、Haspelmath and König (1995) による副動詞の論文集を皮切りに通言語的な研究が盛んとなり、以後、Van der Auwera (1998), Coupe (2006), Ebert (2008) などによって副動詞の言語類型論的定義が議論されている。まず、Haspelmath and König (1995) 所収の Haspelmath (1995) と Nedjalkov (1995) による、通言語的な副動詞の定義と分類について述べる。この二者による定義と分類は、以後の言語類型論的な議論の土台となっている。Haspelmath (1995) は、(1) のように、従属節述語としての副動詞の機能を重視している。

- (1) a nonfinite verb form whose main function is to mark adverbial subordination.

(Haspelmath 1995:3)

一方、Nedjalkov (1995) は、(2) のような定義を提唱し、副動詞が従属節述語であることを特に明記していない。

- (2) a converb as a verb form which depends syntactically on another verb form, but is not its syntactic actant, i.e., does not realize its semantic valencies. (Nedjalkov 1995: 97)

下記に、Nedjalkov (1995: 98-100) による副動詞の機能の分類を示す。統語的機能による分類 (1. から 3.) と、統語的機能によらない分類 (4. から 6.) について例を挙げて述べる。例とグロスに Nedjalkov (1995: 98-100) からの引用である。本稿では Nedjalkov (1995) が挙げているチュルク諸語の例 ((3) ~ (8)) を挙げる。それぞれの例の引用元である Juldašev (1977), Dmitriev (1962), Kononov (1960) も参照し、もし Nedjalkov (1995) で表記・グロスの間違いがあれば筆者の責任で書き改める。脚注にて Nedjalkov (1995) による原文を掲げ、筆者が書き改めた箇所については太字と下線で示す。

統語的機能による分類は次の 1. から 3. の通りである。「1. 単文における副詞的機能」の例 (3) では、副動詞 *sajkal-yp* 「揺れながら」が、汽船の *jöz-op bar-a* 「泳いでいく」という動作を修飾している。「2. 二次的述語あるいは等位述語の機能」の例 (4) では、同一主語による動作の連続が副動詞の連続によって表されている。「3. 従属節述語の機能」の例 (5) では、従属節が表す動作が起こるまで主節が表す動作が行われていたことが表されている。

Three main types of converbs according to the syntactic function they fulfill:

1. The function of an adverbial in a simple sentence

(3) バシキール語 (北西語群; Juldašev 1977: 53)

*Ap-ak ður paroxod **sajkal-yp** jöd-öp bar-a.*¹
 very-white big steamer rock-CONV float-CONV go-PRES
 「真っ白な大きな汽船が揺れながら進んでいく。」

2. The function of a secondary or coordinate predicate

(4) トルクメン語 (南西語群; Dmitriev 1962: 401)

*Ol gapa jakynlaş-yp, gapy-ny dyrkyldad-yp, ...*²
 he door.DAT approach-CONV door-ACC knock-CONV
 「彼は扉に近づいて、扉をノックして、…」

3. The function of the predicate of a subordinate clause

(5) バシキール語 (北西語群; Juldašev 1977: 80)

*Ul qapqa-ny şyğyrđat-yn as-yp **in-gänse**, Salix quđğal-maj baθ-yp tor-đo.*³
 he gate-ACC creak-CONV open-CONV go.in-CONV Salix move-CONV press-CONV stand-PAST
 「彼が扉をきしませながら開けて入るまで、サリフは動かずに (扉を) 押していた。」

統語的機能によらない分類は、次の 4. から 6. の通りである。「4. 複合動詞の構成要素とし

¹ Nedjalkov (1995: 98) では、*Ap-ak zur paroxod sajkal-yp jöz-op bar-a.* と表記されている。

² Nedjalkov (1995: 98) では、下記のように表記されている。

Ol gapa jakynlaş-yp, gapa-ny dyrkyldat-yp, ...
 he door approach-CONV door-ACC knock-CONV

³ Nedjalkov (1995: 99) では、下記のように表記されている。

Ul qapqa-ny şyğyrđatyn as-yp in-gänse, Salix duđğal-maj baθ-yp tor-zo.

ての副動詞」の例 (6) は、*hat-*「売る」の副動詞形と *al-*「もらう」から成り立ち、「買う」を意味する複合動詞である。「5. いくつかの aspekto 的意味を表す (準) 補助動詞を含む、規範的なルールによって形成される複合動詞の構成要素としての副動詞」の例 (7) は、*ölgör-*「熟す」の副動詞形に *jet-*「着く」が続くことで、熟す過程が完了したことを表している。「6. 動詞の tens- aspectto の語形変化の一部である、統合的あるいは分析的な形式の構成要素としての副動詞」の例 (8) は、副動詞が主観的過去 (subjective past; Nedjalkov 1995: 100) を表す定形動詞接辞として機能している例である。

Three main nonsyntactic functions of converbs:

4. Converbs as constituents of complex verbs (new lexical units)

(6) バシキール語 (北西語群)

hat-yp al-
sell-CONV take
「買う」

5. Converbs as constituents of complex verbs formed by standard rules, including (semi-)auxiliary verbs that express various aspectual meanings

(7) バシキール語 (北西語群)

ölgör-öp jet-
ripen-CONV reach
「完熟した、熟しきった」

6. Converbs as constituents of synthetic or analytic forms that are part of the tense-aspect paradigm of the verb

(8) ウズベク語 (南東語群; Kononov 1960: 220-225)

*išla-b=man*⁴
work-CONV=1SG
「私は働いたようだ。」

統語的機能によらない分類 (4. から 6.; (6) から (8)) を参照すると、Nedjalkov (1995) による分類が上記の Haspelmath (1995: 3) による定義に含まれる機能 (副詞的な従属節述語) よりも広い、統語的機能によらない分類も射程に収めていることがわかる。ただし、筆者は (8) を副動詞として分類しない。なぜならば、ウズベク語の主観的過去 *-(i)b* は、副動詞とは統語機能が異なり人称接語が必ず後続する点で、共時的には定動詞として分析されるためである。のちに挙げる江畑 (2023) も、Nedjalkov (1995) による 6. を自身の分類に含めていない。詳しくは、次ページの表 1 を参照されたい。

Johanson (1995) は、チュルク諸語における副動詞の用法を下記のように Level 1 から 4 ま

⁴ Nedjalkov (1995: 100) では *išla-b-ma* と表記され、グロスが付されていない。

で分類している⁵。Level 1 では、副動詞による節と主節の主語が異なっており、それぞれの節が “full” predication をなしている。Level 2 では、副動詞による節と主節の主語が同じである。Level 3 では、副動詞が語彙的な複合動詞の前部をなしており、Level 4 では、副動詞の後に来る動詞が文法化されて補助動詞として用いられている。

Level 1: the base segment and the converb segment are “full” predications

(9) トルコ語 (南西語群)

Ali gel-ince Osman şaşır-d-ı.

Ali come-CONV Osman be surprised-TRM.PAST-3.SG

「アリが来るとオスマンは驚いた。」

Level 2: the converb segment and the base segment have the same first actant

(10) トルコ語 (南西語群)

Ali gelince şaşır-d-ı.

Ali come-CONV be surprised-TRM.PAST-3.SG

「アリは来ると驚いた。」

Level 3: predicate (predicate core 1 + predicate core 2)

(11) トルコ語 (南西語群)

al-ıp gel-

take-CONV come

「持ってくる」

Level 4: predicate core (lexeme + postverb)

(12) キルギス語 (北西語群)

Oqu-p tur-d-u.

read-CONV stand-TRM.PAST-3.SG

「彼 (女) は読み続けていた。」

江畑 (2023) は、Nedjalkov (1995) と Johanson (1995) による分類と対比させながら、自身による副動詞の用法の分類を示している。江畑 (2023) による分類を表 1 に示す。

⁵ Johanson (1995) は level 分けの基準については明確に言及していないが、次のように言及している : “The base segment with which the converb segment is in construction may be a full predication, a more reduced one, or a more limited predicative element.” (Johanson 1995: 314)

上記 Johanson (1995: 314) の言及から判断するに、Johanson (1995) は副動詞が full predication を成す、つまり、副動詞が主節動詞とは異なる主語を取って単文のようにふるまっている場合を Level 1 とし、主節動詞への統語的な依存度にしたがって level 分けを行っていると考えられる。

表 1: 副動詞の用法分類

江畑	節連鎖		副詞句	複雑述語の要素		---
Johanson	L1	L2	---	L3	L4	---
Nedjalkov	2.	3.	1.	4.	5.	6.
例	(4), (9)	(5), (10)	(3)	(6), (11)	(7), (12)	(8)

(江畑 2023: 111; 最下列の例文番号は筆者が付す)

Haspelmath (1995) による副動詞の定義 “a nonfinite verb form whose main function is to mark adverbial subordination.” (1) だと「複雑述語の要素」「副詞句」は取り扱えない。さらに言えば、副動詞節の従属度が低い例、つまり Johanson (1995) の Level 1 に相当する例 ((4), (9)) も扱え切れない⁶。Johanson (1995) による分類でも「副詞句」は取り扱っていない。Nedjalkov (1995) による分類が最も汎用性が高いように思われるが、本稿では、Nedjalkov (1995) による分類を概観した際に「6. 動詞のテンス・アスペクトの語形変化の一部である、統合的あるいは分析的な形式の構成要素としての副動詞」は共時的には定動詞として分析する立場を取る、と述べた。江畑 (2023) による副動詞の分類は、「副詞句」を含み、Nedjalkov (1995) による分類の 6. を除外していることから、通言語的に最も整理されていると言える。そのため、本稿では江畑 (2023) にしたがって特集論文の論点を整理する。

3. 本特集論文の論点

はじめに、副動詞について論じる際に、チュルク諸語を取り上げる理由を述べる。それから、本特集で扱う各論文の論点について概観し、今後の課題を述べる。

本特集では、チュルク諸語における副動詞について論じる。風間 (2012: 140) によれば、「アルタイ型言語では、副動詞の種類が多く、その使用頻度もきわめて高い。」という。「アルタイ型」というのは、「いわゆる「アルタイ諸語」、すなわち、チュルク語族、モンゴル語族、ツングース語族に属する諸言語に特徴的に見いだされる言語類型 (linguistic type)」（亀井・河野・千野 1996: 29) を指す。この類型では、文の述語が必ず文末に位置し、修飾語が被修飾語に先行する。本特集では、副動詞自体の種類も豊富であり副動詞の使用頻度も高いチュルク諸語に属する個々の言語において問題となる現象を掘り下げること、チュルク諸語以外の言語を研究する際の論点を提供することを目的とする。

本特集が含む三つの論文について、表 1 の右から「複雑述語の要素」「節連鎖」の順に述べる。つまり、本特集では、Haspelmath (1995) で扱われていない問題と、副動詞の定義の核心へと進むように各論文を配置する。「複雑述語の要素」は、日高論文 (本論文) と菅沼論文で取り扱われている。日高論文では、中央アジアのチュルク諸語における *V-(I)p bol-* の通時的発展 (動作の完遂から可能、認識的モダリティ) を意味領域地図の点から明らかにしている。菅沼論文では、カラチャイ・バルカル語 (北西語群) において、非意思的な行動を表し、時に瞬時の状態変化を表すとされる、三つの補助動詞 (*-(I)b iy-* “lit. ～て送る”, *-(I)b kal-* “lit. ～て残る”, *-(I)b koy-* “lit. ～て放置する) の異同を明らかにしている。菱山

⁶ Haspelmath (1995: 7-8) 自身も、チュルク諸語北西語群に属するクムク語にて副動詞が節連鎖 (clause-chaining) に用いられている例を挙げ、この例の副動詞は真に副詞的ではないとしたうえで、そもそも時間的な副詞的な従属と節連鎖を明確に区別することは簡単ではない、と述べている。

論文では、チュヴァシ語 (オグル語群) における「節連結」を担う副動詞のうち、条件副動詞の二つの形 (短形 *-sAn* と長形 *-sAssĀn*) について、長形は使用頻度の低い二次的な形式であることを主張している。

本特集に所収されている論文は江畑 (2023) の分類における各項目を取り扱っているが、今後は本特集で扱いきれていない以下の点については、個別言語におけるさらなる記述および通言語的な観点からの研究が待たれる。

- ・主節述語への通時的発展
- ・副動詞を含む複雑述語 (非補助動詞)、副動詞由来の接続詞・後置詞
- ・副動詞の否定形式および否定の作用域

上記三点に関わる既存の研究について下記に簡単にまとめる。Pellard (2012) では、脱従属化によって副動詞が主節述語へ発展することが指摘されている。Pellard (2012) は、南琉球宮古語大神方言の継起副動詞が過去形へと発展することを指摘し、この発展が通言語的にも珍しいことではないと述べている。Nedjalkov (1995) による分類でも、副動詞が主節述語として用いられている例 (8) *išla-b=man* [work-CONV=1SG] 「私は働いたようだ。」が挙げられている。この副動詞の用法は、通時的には *-(i)b tur-ur* [-CONV stand-AOR] 「～している状態である」という補助動詞構造にさかのぼると考えられる (Johanson 2003: 287-288)。日本語の複雑述語に関しては岸本・由本 (2014) をはじめとする膨大な研究の蓄積がある。日本語の動詞のいわゆる中止形 (テ形) 由来の後置詞については高橋 (2003: 263-269) を参照されたい。Johanson (1995: 337-339) は、チュルク諸語における副動詞の否定形式および否定の作用域について取り上げているが、それぞれのチュルク諸語において否定の作用域についての適用規則が十分に記述されていない、と述べている。

II. 中央アジアのチュルク諸語における *V-(l)p bol-*

1. はじめに

中央アジアのチュルク諸語 (Trk.=トルクメン語 (南西語群)、Kr.=キルギス語、Kaz.=カザフ語 (共に北西語群)、Uz.=ウズベク語、Uy.=現代ウイグル語 (共に南東語群))⁷ では、*V-(l)p bol-* [V(= verb stem)-CVB be-]⁸ の意味に異同がある。多くのチュルク諸語では、*V-(l)p bol-* は動作の完遂を表すが、同時にトルクメン語 (南西語群) では許可・禁止 (Clark 1998: 307, 風間 2022: 465)、カザフ語とウズベク語では非人称の参与者外 (不) 可能も表す (Rentzsch 2015: 95)。*V-(l)p bol-* のモダリティ的な意味の通時的発展には、次の二つの説が挙げられている。

⁷ 本稿第 II 部における各言語の表記方法は次のとおりである: トルクメン語とウズベク語は、各言語のラテン文字正書法によって表記する。キルギス語のキリル文字翻字はアクマタリエフ (2014: 6) による翻字、カザフ語のキリル文字翻字は Muhamedowa (2016: xvii) による翻字、現代ウイグル語のアラビア文字翻字は風間・新田 (2023) による翻字を、それぞれ採用する。

⁸ 本稿では大文字で母音調和による代表形を示す。ここでは、セミコロンの上に *I* に対応する異音を、セミコロンの下に *-(l)p bol-* に対応する音形を、それぞれ次に示す: Trk. *i, ü, y, u; -(l)p bol-*, Kaz. *i, i; V-(l)p bol-*, Kr. *i, ü, i, u; -(l)p bol-*, Uz. *i; -(i)b bo'ʻl-*, Uy. *i, ü, u; -(l)p bol-* 本稿では、各言語において *V-(l)p bol-* に対応する音形を *-(l)p bol-* で代表して表記する。

Schönig (1987: 15) は、動作的な意味 (動作の完遂) からモダリティ的な意味が発展したと述べている。一方、Rentzsch (2015: 95) は、Schönig (1987: 15) の説明よりも妥当性のある説明として、モダリティ的な意味の発展は、単に *V-GAll bol-* 中の目的副動詞 *V-GAll* が *V-(I)p* に置き換えられたことによる、と述べている。

本稿では、中央アジアのチュルク諸語における *V-(I)p bol-* の意味・用法を、先行研究の記述および筆者の聞き取り調査によって整理することで、Schönig (1987: 15) による説と Rentzsch (2015: 96) による説のどちらがより妥当であるかについて検討する。Van der Auwera and Plungian (1998) による可能性に関する意味領域地図に各言語の状況を照らし合わせると、いずれの言語でも *V-(I)p bol-* が能力可能＝参与者内可能を欠いている⁹。これは、一方向的に各意味が発展した場合、共時的に各意味が隣接しなければならないという意味領域地図の原則に違反しているが、動作の完遂とモダリティ的な意味が別々に発達したと考えれば、矛盾がない。したがって、本稿は Schönig (1987: 15) の説ではなく、Rentzsch (2015: 96) による説を支持すると結論付ける。

本稿の構成は次の通りである。2 節で先行研究を概観し、問題提起を行い、3 節で分析を行い、その分析結果をもとに、4 節で考察を述べる。なお、先行研究からの用例にグロスが付されていればそのグロスも引用し、付されていなければ筆者が付す。例文番号・日本語訳・太字などの文字飾りは筆者による。*bol-* のグロスには *be* 「である」と *become* 「なる」があるが、本稿では統一せず参照元のグロスを引用する。

2. 先行研究概観と問題提起

2.1 節では、中央アジアのチュルク諸語における *V-(I)p bol-* について概観する。2.2 節では、*V-(I)p bol-* のモダリティ的な意味の通時的発展に関する二つの説について述べたのちに、本稿の考察にて用いる Van der Auwera and Plungian (1998: 94) による可能性の意味領域地図について述べる。

2.1. 中央アジアのチュルク諸語における *V-(I)p bol-*

Rentzsch (2015: 95) は、多くのチュルク諸語では、*V-(I)p bol-* は動作の完遂を表すと指摘している。ただし、動作の完遂だけではなく、モダリティ的な意味も表しうる。トルクメン語 (南西語群) では「禁止」に *V-(I)p bol-* が用いられることが指摘されている。

(1) 拘束的・禁止「(腐っているから、あなたは) それを食べてはいけない。」

Trk. *Zaýalan-yp=dyr, o-ny iý-ip bol-anok.*
go.bad-CVB.PFV=COP.ASSERT that-ACC eat-CVB.PFV be-NEG.PRS (風間 2022: 465)

モダリティ的な意味を表す *V-(I)p bol-* はトルクメン語以外でも用いられるが、禁止 (1) とは異なる意味も表しうる。Rentzsch (2015: 94) は、カザフ語 ((2); 北西語群) とウズベク語 ((3);

⁹ 本稿で言う「能力可能」「状況可能」「許可・禁止」は、それぞれ Van der Auwera and Plungian (1998) のいう「参与者内可能 participant-internal possibility」、「参与者外可能 participant-external possibility」、「束縛的可能 deontic modality」に相当する。

南東語群) では、非人称の参与者外 (不) 可能を表す¹⁰と述べている¹¹。

- (2) Kaz. *Minaw el-diñ, qažirli el-diñ däl bul is-in*
DEM people-GEN energetic people-GEN exactly DEM matter-POSS.3.ACC
ayaqsız tasta-p bol-ma-ydï!
fruitless throw-CVB become-NEG-INTRA
‘The concern of this industrious people may not remain without result.’ (Rentzsch 2015: 94)

- (3) Uz. *Nasib-dan qoch-ib bo‘l-ma-ydi.*
share-ABL flee-CVB become-NEG-INTRA
‘One cannot escape one’s destiny.’ (Rentzsch 2015: 94)

2.2. Rentzsch (2015) と Schönig (1987) による説はどちらがより妥当なのか

本節では、*V-(I)p bol-* のモダリティ的な意味の通時的発展に関する二つの説を取り上げたのちに、仮に Schönig (1987) による説に従えば、可能性に関する意味領域地図に沿った発展となることを指摘し、本稿における問題を提起する。

V-(I)p bol- のモダリティ的な意味の通時的発展に関して二つの説が挙げられる。Schönig (1987: 15) は、動作的な意味 (動作の完遂) からモダリティ的な意味 (非人称の参与者外 (不) 可能) が発展したと述べている。しかし、Rentzsch (2015: 95) は、*V-(I)p bol-* が動作的な意味を表すマーカーとしてよりも早く参与者外可能を表すマーカーとして安定して現れていたと述べ、さらに、モダリティ的な意味 (非人称の参与者外 (不) 可能) の発展は、単に *V-GAI* *bol-* 中の目的副動詞 *V-GAI* が *V-(I)p* に置き換えられたことによる、と述べている。その理由について、Rentzsch (2015: 96) は、可能を表すあらゆる構造において専ら *bol-* が多く用いられるため、動作的な意味を介してモダリティの意味が生まれたと想定する必要はないだろう、と述べている。

Schönig (1987: 15) によれば、動作的な意味 (動作の完遂) からモダリティ的な意味 (非人称の参与者外 (不) 可能) への発展は、*bol-* 自体の「なる」という意味と、「なる」から「終わる」という意味に拡張したことによって引き起こされたという。例えば、本動詞としての Kaz. *bol-* は ‘to be accomplished’ という語義を含み (Shinitnikov 1966: 55)、Uz. *bo‘l-* も「終わる」という語義を含む (中嶋 2015: 35)。もし Schönig (1987: 15) による説を正しいと仮定す

¹⁰ Rentzsch (2015: 94) は、脚注にて、現代のカザフ語では非人称の参与者外 (不) 可能を表す *V-(I)p bol-* は通常許容されないと述べている。本稿の調査においても (2) は非文とされた (詳しくは 3.2 節の (12) を参照されたい)。

¹¹ 日高 (2023) は、『語学研究所論集』に所収されている、中央アジアのチュルク諸語五言語におけるモダリティに関するデータを対照している。これらのデータは、風間 (2011) による調査例文を用いて母語話者から聞き取り調査を行って得られたものである。この中で、*V-(I)p bol-* はトルクメン語の禁止「～してはいけない」に用いられているのみである。詳しくは本稿の (1) を参照されたい。(1) は日高 (2023: 118) にも引用されている。能力可能と状況可能には *V-(I)p bol-* は観察されず、トルクメン語では *-(I)p bil-* [-CVB know] が用いられ、それ以外では副動詞 *-A/-y* に続いた *ol-* あるいは *al-* 「取る」が用いられている。それぞれの例文について詳しくは日高 (2023: 130-131) を参照されたい。

ると¹²、下記の Van der Auwera and Plungian (1998: 94) による可能性の意味領域地図にしたがえば、*V-(I)p bol-* の意味は、‘finish’から参与者内可能性、参与者外可能性、束縛的可能性へと発展しうる。

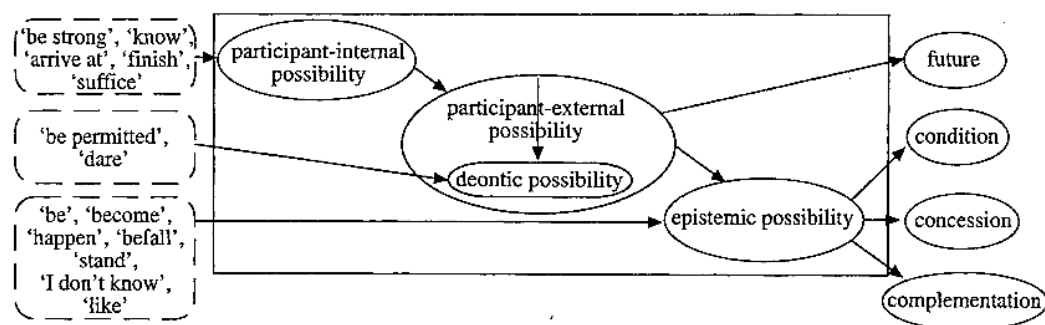


図 1: 可能の意味領域地図 (Van der Auwera and Plungian 1998: 94)

意味領域地図では、一つの経路において、共時的に存在する複数の意味領域は隣り合わない (Van der Auwera and Plungian 1998: 113)、という原則がある。この原則に従うと、もしある言語の *V-(I)p bol-* が束縛的可能性を表すとすれば、発展の前段階の参与者内可能性も参与者外可能性も表す、となる。中央アジアの五言語における *V-(I)p bol-* がどのようなモダリティ的な意味を表すのかについて検討し、もし共時的に *V-(I)p bol-* が参与者内可能性も参与者外可能性も束縛的可能性も表すことが検証できれば、Schönig (1987: 15) による「動作的な意味からモダリティ的な意味へ発展した」というシナリオの妥当性が高いと言える。反対に、例えば、共時的に *V-(I)p bol-* が束縛的可能性を表すのに、参与者内可能性・参与者外可能性のいずれかは表さないということがあると、Schönig (1987: 15) による説のほうが妥当性が低いと判断できる。この場合、さらに、Rentzsch (2015: 95) による「*V-(I)p bol-* のモダリティ的な意味の発展は、単に *V-GAI bol-* 中の目的副動詞 *V-GAI* が *V-(I)p* に置き換えられた」という説を検証する必要がある。

以上で述べた通り、本稿では、各言語の *V-(I)p bol-* が、動作の完遂、能力可能 (= 参与者内可能)、状況可能 (= 参与者外可能)、許可・禁止 (= 束縛的可能性) を表しうるかを検証する。その検証結果を用いて、Schönig (1987: 15) による説と Rentzsch (2015: 96) のどちらがより妥当であるかについて議論する。

3. *V-(I)p bol-* [V-cvb be-] が表す意味の検証

本節では、中央アジアの五言語における *V-(I)p bol-* が動作の完遂、能力可能、状況可能、許可・禁止を表すかどうかを検証する。動作の完遂については先行記述による例文を挙げ

¹² 図 1 の意味領域地図によれば、図 1 左下にある ‘be’, ‘become’ は、epistemic possibility へ発展しうることが示されている。本稿の 2.1 節には *-(I)p bol-* が epistemic modality を表す例はないが、動作の完遂 (Rentzsch 2015: 95) および参与者外可能 ((2), (3)) ・許可・禁止 (1) を表すことから、筆者は ‘be’, ‘become’ ではなく ‘finish’ からの発展を想定するほうが妥当であると判断する。なお、‘finish’ からのモダリティ的な意味の発展を想定することは、Schönig (1987: 15) による説に沿っている。

る。能力可能、状況可能、許可・禁止については、先行研究に *V-(I)p bol-* の記述がなければ、風間 (2011: 49-55) による日本語例文によって引き出された各言語の例 (トルクメン語は風間 2022、カザフ語は聞き出しによる用例、キルギス語はアクマタリエワ 2011、ウズベク語は日高 2013、ウイグル語は風間・新田 2023 から引用) の一部を *V-(I)p bol-* に置き換えて、それが非文であるかどうかを母語話者に尋ねた。トルクメン語 (3.1 節) は 1991 年生・トルクメニスタン・マリ市出身の男性に、カザフ語 (3.2 節) は 1994 年生・カザフスタン共和国・シムケント市出身の女性に、キルギス語 (3.3 節) は 1978 年生・キルギス共和国・ナルン市出身の女性に、ウズベク語 (3.4 節) は 1994 年生・ウズベキスタン共和国・タシケント市出身の女性に、現代ウイグル語 (3.5 節) は 1990 年生・中華人民共和国・新疆ウイグル自治区・カシュガル市出身の男性に、それぞれ調査への協力を依頼した¹³。

3.1. トルクメン語 (南西語群)

Trk. *V-(I)p bol-* は、動作の完遂 (4)、状況可能 ((5), (6))、許可 (7)・禁止 (8) も表す。

- (4) *Annaguly çay-y-ny iç-ip bol-dy.*

PN tea-3.POSS-ACC drink-CVB be-PAST

「アンナグルはお茶を飲み終えた。」 (Clark 1998: 326)

- (5) *Žygyladyk-da gowy haly al-yp bol-ýar.*

PLN-LOC good rug get-CVB be-PRS

「ジグルドゥック (地名) でよいカーペットを買うことができる。」 (Clark 1998: 307)

- (6) *Bu yol gaty batga. Mun-dan ýuk-li araba-ny sür-üp bol-maz.*

this road very muddy this-ABL load-PROP wagon-ACC drive-CVB be-AOR.NEG

「この道は非常にぬかるんでいる。だから、荷を積んだ台車は運転できない。」

(Clark 1998: 307)

- (7) *Çilim çek-ip bol-ar=my?*

cigarette smoke-CVB be-AOR=Q

「タバコは吸えますか? / タバコを吸ってもいいですか。」 (Clark 1998: 307)

¹³ 脚注 11 で述べたように、トルクメン語以外の中央アジアのチュルク諸語ではモダリティを表す *V-(I)p bol-* はそれほど用いられないようである。もしかしたら、モダリティを表す *V-(I)p bol-* が使われるには条件がある可能性がある。例えば、2.1 節の (2) と (3) では、カザフ語とウズベク語では *V-(I)p bol-* が否定と用いられて、不可能が表されている。Hidaka (2023) は、否定形あるいは修辭疑問文で用いられる場合は不可能を表し、*faqat ... =gina* 「～だけ」とともに用いられる場合は制限された可能性が表されると指摘し、肯定形で用いられることはないとは指摘した。ただし、本稿では、ウズベク語以外の言語について *V-(I)p bol-* が使われる条件にまで調査することはできなかった。今後、各言語の *V-(I)p bol-* について、可能や拘束的モダリティを表す他の表現と対照しながら詳しく調査を行う必要がある。

- (8) *Zaýalan-yp=dyr, o-ny iý-ip bol-anok.*
 go.bad-CVB.PFV=COP.ASSERT that-ACC eat-CVB.PFV be-NEG.PRS
 「(腐っているから、あなたは)それを食べてはいけない。」(風間 2022: 465; (1) 再掲)

ただし、能力可能は表せない。母語話者に (9) の *oka-p bil-yär* 「読むことができる」(風間 2022: 467) を *oka-p bol-yär* に置き換えた文を提示したところ、非文であると判断された。

- (9) *Ol hytay-ça {oka-p bil-yär / *oka-p bol-yär}.*
 that chinese-language read-CVB.PFV know-PRS read-CVB.PFV be-PRS
 「あの人は中国語が読めます。」

3.2. カザフ語 (北西語群)

Kaz. *V-(I)p bol-* は、動作の完遂 (10) を表すが、モダリティの意味は表せない ((11)~(14))。

- (10) *Obed iš-ip bol-di-m.*
 lunch drink-CONV AUX-PAST-1SG
 「私は昼食を食べ終えた。」(Muamedowa 2016: 117)

(11) に能力可能についての例を挙げる。Kaz. *V-(I)p bol-* は能力可能を表せない。母語話者に *oqı-y al-a=dı* 「読むことができる」(日高 2023: 130) を *oqı-p bol-a=dı* に替えた文を提示したところ、非文であると判断された。

- (11) *Ana kisi/adam qıtayša {oqı-y al-a=dı / *oqı-p bol-a=dı}.*
 that person Chinese read-CVB.CNT take-NPST=3 read-CVB.SEQ be-NPST=3
 「あの人は中国語が読めます。」

状況可能も表せない。母語話者は Rentzsch (2015: 94) による *V-(I)p bol-* を含む例 (12) = (2) は非文であると判断し、代わりに、*V-(U)w-ya bol-* という動名詞を含む構造を用いた用例を提案した。

- (12) *Minaw el-diñ, qažirli el-diñ дәл bul is-in*
 DEM people-GEN energetic people-GEN exactly DEM matter-POSS.3.ACC
*ayaqsız {*tasta-p bol-ma-ydı! / tasta-w-ya bol-ma-ydı!}*
 fruitless throw-CVB become-NEG-INTRA throw-VN-DATbe-NEG-INTRA
 「この人々の、精力的な人々の、この問題は結果なしに放れない！」

許可も表せない。母語話者に (13) の *qayt-a ber-üw-ge bol-a=dı* 「帰ってよい」(エリシテーションによる用例) を *qayt-a ber-ip bol-a=dı* に替えた文を提示したところ、非文であると判断された。

- (13) *bol-dī-ø, qayt-a {ber-üw-ge bol-a=dī / *ber-ip bol-a=dī}.*
 be-PAST-3 return-CVB.CNT give-VN-DAT be-NPST=3 give-CVB.SEQ be-NPST=3
 「(その仕事が終わったら) もう帰ってもいいですよ。」

禁止も表せない。母語話者に (14) の *že-w-ge bol-ma-y=dī* 「食べてはいけない」 (エリシテーションによる用例) を *že-p bol-ma-y=dī* に替えた文を提示したところ、非文であると判断された。

- (14) *onī {že-w-ge bol-ma-y=dī / *že-p bol-ma-y=dī}.*
 3SG.ACC eat-VN-DAT be-NEG-NPST=3 return-CVB be-NEG-NPST=3
 「(腐っているから、あなたは) それを食べてはいけない。」

3.3. キルギス語 (北西語群)

Kr. *V-(l)p bol-* は、カザフ語と同様に、動作の完遂 (15) を表すが¹⁴、モダリティ的意味 ((16) ~ (19)) は表せない。

- (15) *Birinči kar ötköndö jaa-p bol-du,...*
 一番目 雪 先日 降る-CVB なる-PAST
 「初雪が先日降り終わった、…」 (アクマタリエワ 2023: 70)

能力可能は表せない。母語話者に (16) の *oku-y al-a-t* 「読むことができる」 (アクマタリエワ 2011: 205) を *oku-p bol-o-t* に替えた文を提示したところ、非文であると判断された。

- (16) *Al kītayča {oku-y al-a-t / *oku-p bol-o-t}.*
 彼 中国語 読む-CVB 取る-PRES-3 読む-CVB なる-PRES-3
 「あの人は中国語が読めます。」

状況可能も表せない。母語話者に (17) の *oku-y al-ba-y-m* 「読めない」 (アクマタリエワ 2011: 205-206) を *oku-p bol-bo-y-m* に替えた文を提示したところ、非文であると判断された。

- (17) *Karangī. Ošonduktan, emne de-p jaz-īl-īp tur-gan-ī-n*
 暗い だから 何 言う-CVB 書く-PASS-CVB 立つ-PART-3:POSS-ACC
*{oku-y al-ba-y-m / *oku-p bol-bo-y-m}.*
 読む-CVB 取る-NEG-PRES-1SG 読む-CVB なる-NEG-PRES-1SG
 「明かりが暗くて、ここに何て書いてあるのか、読めない。」

¹⁴ (15) では「初雪が降り終わる」という動作が示されており、これは動作の完遂というよりも事象の終結に近いと言える。インフォーマントによれば、より「動作の完遂」に近い読みであると考えられる、「お茶を飲み終える」「本を読み終える」などの「終える」には、*V-(l)p bol-* を用いることができないという。

許可も表せない。母語話者に (18) の *Ket-e ber-se-ŋ bol-o-t*。「帰ってよい」(アクマタリエワ 2011: 203)を *Ket-e ber-ip bol-o-t* に替えた文を提示したところ、非文であると判断された。

- (18) (*Jumuš-uŋ büt-sö*) *Ket-e {ber-se-ŋ bol-o-t /*
 (仕事-2SG:POSS 終わる-COND) 行く-CVB 与える-COND-2SG なる-PRES-3
**ber-ip bol-o-t*.
 与える-CVB なる-PRES-3
 「(その仕事が終わったら) もう帰ってもいいですよ。」

禁止も表せない。母語話者に (19) の *je-gen-ge bol-bo-y-t*。「食べてはいけない」(アクマタリエワ 2011: 203) を *je-p bol-bo-y-t* に替えた文を提示したところ、非文であると判断された。

- (19) (*Sas-ip ket-iptir*) *Ani {je-gen-ge bol-bo-y-t /*
 (腐る-CVB 行く-PST4) それ(ACC) 食べる-PST2-DAT なる-NEG-PRES-3
**je-p bol-bo-y-t*.
 食べる-CVB なる-NEG-PRES-3
 「(腐っているから、あなたは) それを食べてはいけない。」

3.4. ウズベク語 (南東語群)

Uz. *V-(I)p bol-* は、動作の完遂 (20) あるいは状況可能 (21) を表す。Bodrogligeti (2003: 725) によれば、*V-(I)p bol-* が否定を表す形式を伴う場合に、*V-(I)p bol-* が可能を表すという。ただし、そのほかのモダリティの意味は表せない。

- (20) *Men bu hikoya-ni yoz-ib bo'l-di-m.*
 1SG this story-ACC write-CVB.SEQ be-PAST-1SG
 'I finished writing this story.' (Bodrogligeti 2003: 725)

- (21) *Buloq-qa och-il-gan yo'l-dan ikki chelak-ni ol-ib*
 spring-DAT open-PASS-PTCP.PAST road-ABL two bucket-ACC take-CVB.SEQ
o't-ib bo'l-mas=di.
 pass-CVB.SEQ be-PTCP.FUT=PAST
 「泉 (のため) に開かれた道を、二つのバケツを持って通り過ぎることはできなかった。」
 (Bodrogligeti 2003: 725)

能力可能は表せない。母語話者に (22) の *o'qi-y ol-a=di*「読むことができる」(日高 2013: 480) を *o'qi-b bol-a=di* に替えた文を提示したところ、非文であると判断された。

- (22) *{U/ Ana u} odam xitoy til-i{-da/-ni} {o'qi-y ol-a=di /*
 that very that person China language-3.POSS-LOC/-ACC read-CVB take-NPST=3

***o‘qi-b bol-a=di}.**

read-CVB be-NPST=3

「あの人は中国語が読めます。」

許可も表せない。母語話者に (23) の *qayt-sa-ng ham bo‘l-a=di* 「帰ってもいい」 (日高 2013: 477) を *qayt-ib bo‘l-a=di* に替えた文を提示したところ、非文であると判断された。

(23) *Shu ish-ni tugat-sa-ng, {qayt-sa-ng ham bo‘l-a=di /*
that work-ACC finish-COND-2SG return-COND-2SG also become-NPST=3

***qayt-ib bo‘l-a=di}.**

return-CVB be-NPST=3

「(その仕事が終わったら) もう帰ってもいいですよ。」

禁止も表せない。母語話者に (24) の *yey-ish-ing {kerak/mumkin} emas-ø* 「食べてはいけない」 (日高 2013: 477) を *ye-b bol-may=san* に替えた文を提示したところ、非文であると判断された。

(24) *Ayni-b qol-gan-i uchun, sen bu-ni {yey-ish-ing*
go.bad-CVB remain-PTCP.PAST-3.POSS because 2SG this-ACC eat-VN-2SG.POSS

{kerak/ mumkin} emas-ø / *ye-b bol-ma-y=san}.

necessarypossible COP.NEG-3SG eat-CVB be-NEG-NPST=2SG

「(腐っているから、あなたは) それを食べてはいけない。」

3.5. 現代ウイグル語 (南東語群)

Uy. *V-(I)p bol-*は、カザフ語やキルギス語と同様に、動作の完遂 (25) を表すが、モダリティ的意味 ((26)~(29)) は表せない。

(25) *Jümä vä pešin namaz-lir-i oqu-l-up bol-uş bilän=la Hoşur*

Friday and noon pray-PL-3.POSS read-PASS-CVB be-VN with=EMPH PN

imam aldira-p¹⁵ orn-i-din tur-di.

imam be.hurry-CVB place-3.POSS-ABL stand-PAST

「金曜正午の祈りが読まれ終わってすぐに、ホシュルイマームは急いでその場から立った。」 (Ibrahim 1995:127)

(26) に能力可能の例を挙げる。Uy. *V-(I)p bol-*は、能力可能を表せない。母語話者に *oqu-yala-ydu* 「読むことができる」 (風間・新田 2023) を *oqu-p bol-i=du* に替えた文 (26) を提示したところ、非文であると判断された。

¹⁵ 正しくは、*aldira-p* である。

- (26) *U xenzu-çi-ni {oqu-yala-ydu / *oqu-p bol-i=du}.*
 that Chinese-ADV LZ-ACC read-POT-IND.PRS read-CVB.PF be-NPST=3
 「あの人は中国語が読めます。」

状況可能も表せない。母語話者に *bil-el-mi-di-m* 「(何と書いてあるか) わからない」(風間・新田 2023) を *oku-p bol-ma-y=men* に替えた文 (27) を提示したところ、非文であると判断された。

- (27) *Bu qarañgu-da néme de-p yéz-iqliq tur-ğın-i-ni*
 this darkness-LOC what say-CVB.PF letter-ADJ LZ stand-PTCP.PF-3.POSS-ACC
*{bil-el-mi-di-m / *oqu-p bol-ma-y=men}.*
 know-POT-NEG-IND.PST-1SG read-CVB.PF be-NEG-NPST=1SG
 「明かりが暗くて、ここに何て書いてあるのか、読めない。」

許可も表せない。母語話者に *ket-si-ñiz bol-idu* 「帰ってもいい」(風間・新田 2023) を *ket-ip bol-idu* に替えた文 (28) を提示したところ、非文であると判断された。

- (28) *(U iş tügi-se) {ket-si-ñiz bol-idu /*
 that work finish-CVB.COND go-CVB.COND-2SG.HONOR become-IND.PRS
**ket-ip bol-idu}.*
 go-CVB.PF be-IND.PRS
 「(その仕事が終わったら) もう帰ってもいいですよ。」

禁止も表せない。母語話者に *yé-si-ñiz bol-ma-ydu* 「食べてはいけない」(風間・新田 2023) を *yé-p bol-ma-ydu* に替えた文 (29) を提示したところ、非文であると判断された。

- (29) *(U nerse buz-ul-up qal-uptu,) {yé-si-ñiz*
 that thing break-PASS-CVB.PF stay-INDIR.PST eat-CVB.COND-2.HONOR
*bol-ma-ydu / *yé-p bol-ma-ydu}.*
 become-NEG-IND.PRS eat-CVB.PF be-NEG-IND.PRS
 「(腐っているから、あなたは) それを食べてはいけない。」

4. 考察・結論と今後の課題

本節では、まず、3 節の分析結果を整理したのちに、可能の意味領域地図に照らし合わせて Schönig (1987) による「動作の完遂から可能へ発展した」という説を検証する。次に、Rentzsch (2015) による「*V-GAII bol-* の副動詞部分 *V-GAII* が *V-(I)p* に置き換えられた」という説を副動詞と *bol-* の二つの観点に分けて検証し、本稿の結論を述べる。最後に今後の課題を述べる。

3 節の分析結果を Van der Auwera and Plungian (1998: 94) によるモダリティの意味領域地図

(図2)にしたがって、表1に整理する。当該の意味領域を表すセルを灰色に塗りつぶしている。表中の括弧付きの番号は、3節中の例文番号に対応している。

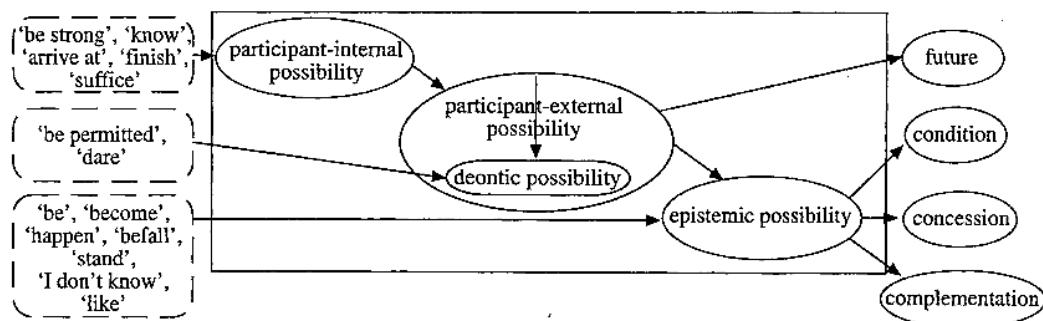


図2: 可能の意味領域地図 (図1再掲)

表1: 中央アジアのチュルク語における *V-(I)p bol-* の意味領域

		動作の完遂 'finish'	能力可能 participant-internal possibility	状況可能 participant-external possibility	許可・禁止 deontic possibility
南西	トルクメン	(4)	(9)	(5), (6)	(7), (8)
北西	カザフ	(10)	(11)	(12)	(13), (14)
	キルギス	(15)	(16)	(17)	(18), (19)
南東	ウズベク	(20)	(22)	否定のみ (21)	(23), (24)
	現代ウイグル	(25)	(26)	(27)	(28), (29)

表1を参照するに、中央アジアのチュルク諸語五言語において、*V-(I)p bol-* は能力可能を表さない。これは、意味領域地図では、一つの経路において、共時的に存在する複数の意味領域は隣り合わなければならない (Van der Auwera and Plungian 1998: 112) という原則に違反している。この原則に従うのであれば、各言語において *V-(I)p bol-* は能力可能と状況可能を表していなければならない。したがって、*V-(I)p bol-* が能力可能を表さないという分析結果から考えるに、Schönig (1987: 15) による「動作的な意味 (動作の完遂) からモダリティ的な意味 (非人称の参与者外 (不) 可能) が発展した」(2.2 節) という、一方向的な発展を支持する説は妥当ではないと言える。

2.2 節で挙げた Rentzsch (2015) による *V-(I)p bol-* に関わる指摘を、副動詞と *bol-* の二つの観点に分けて検証する。まず、副動詞の観点から検証する。Rentzsch (2015) は、古代チュルク語の *V-Gall bol-* が典型的に非人称の参与者外可能を表し (Rentzsch 2015: 38-39)、のちにこの構造のうちの目的副動詞 *V-Gall* 「～するために」が継起副動詞 *V-(I)p* 「～して」に置き換えられた (Rentzsch 2015: 95-96)、と述べている。共時的に見ると、中央アジアのチュルク諸語において、圧倒的に継起副動詞 *V-(I)p* の使用頻度が高く、かつ、そのうちのいくつかの言語では目的副動詞 *V-Gall* は使用範囲が限定されている。カザフ語では書き言葉でしか用いられない (Muhamedowa 2016: 54)、キルギス語では口語・南部方言・口頭での民話でしか用いられない (Zaxarova 1987: 300)、ウズベク語では古典作品に見られる

(Bodrogligeti 2003: 609)。なお、Kononov (1960: 237) は、ウズベク語の *-gali* が *-ganli*¹⁶ > *-ganni* > *-gani* のように発展したと仮定している。

次に、*bol-* の観点から検証する。Rentzsch (2015: 96) は、可能性を表すあらゆる構造において *bol-* が専ら *bol-* が多く用いられるため、動作的な意味を介してモダリティの意味が生まれたと想定する必要はないだろう、と述べている。本稿における分析でも、カザフ語では、与格付き動名詞と組み合わせることで状況可能、許可・禁止が表されている例 ((12), (13), (14))、キルギス語・ウズベク語・現代ウイグル語では、条件形と組み合わせることで、許可・禁止が表されている例 ((18), (23), (28), (29)) を挙げた。これらの形式は、*V-(I)p bol-* が表す動作的な意味を表すことはない。以上より、Rentzsch (2015) による「古代チュルク語の *V-Gall bol-* のうちの目的副動詞 *V-Gall* 「～するために」が継起副動詞 *V-(I)p* 「～して」に置き換えられた」および「動作的な意味を介してモダリティの意味が生まれたと想定する必要はない」という説は妥当だと結論付ける。

最後に、今後の課題3点について述べる。

一つ目は通時的な観点からの課題である。本稿は Rentzsch (2015) による説を支持するという結論に至った。Rentzsch (2015) は、古代チュルク語における *V-Gall bol-* と、現代のチュルク諸語における *V-(I)p bol-* についてのみ言及したうえで、「*V-Gall bol-* の副動詞 *V-Gall* が *V-(I)p* に置き換わった」(Rentzsch 2015: 95-96) という通時的な変化を想定している。本稿では、意味領域地図の観点から、Schönig (1987) による説を棄却し、Rentzsch (2015) による説を支持するに至った。ただし、Rentzsch (2015) による説は、古代チュルク語のみならず、他の文献言語(チャガタイ語、オスマン語など)における副動詞ならびに *bol-* の用法を分析したうえで再度検証することが必要である。

二つ目の課題は、共時的な観点からチュルク諸語全体における *V-(I)p bol-* を見渡す必要があるという点である。例えば、タタール語・バシキール語(共に北西語群)では、*V-(I)p bol-* は参与者外可能しか表さないという(菱山湧人氏私信)。タタール語・バシキール語における *V-(I)p bol-* が動作の完遂を表さないという点で中央アジアのチュルク諸語とは異なる性質を持っていると言える。むしろ *V-(I)p bol-* が動作の完遂を表すことこそが中央アジアのチュルク諸語における特徴である可能性がある。その可能性を検証するためには、チュルク諸語全体において *V-(I)p bol-* が持つ意味機能について調査することが必要である。

三つ目は、チュルク諸語南東語群に属する各言語の特徴に関する課題である。ウズベク語と現代ウイグル語は、Johanson (2021: 23) による系統的な分類にて同じ語群(南東語群)に属するとされている。ただし、表1に示したように、ウズベク語 *V-(I)p bol-* は動作の完遂も参与者外可能も表すが、現代ウイグル語では動作の完遂のみを表すという点で大きな違いがある。2.1 節の(2)と(3)で示したように、むしろウズベク語はカザフ語に近いふるまいを見せる(ただし、(2)は本稿の調査にて非文であることが明らかとなった)。日高(2023: 133)でも現代ウイグル語は独自のふるまいを見せる一方で、ウズベク語とカザフ語は類似したふるまいを見せると指摘している。今後は現代ウイグル語・ウズベク語・カザフ語の

¹⁶ Kononov (1960: 237) では、*-ganli* については特に説明がない。現代のウズベク語から推測するに、形動詞過去 *V-gan* に形容詞派生接辞 *-li* 「～持ちの」が付いたものであると考えられる。

共時態を全体的に比較したうえで、分類を再検討することが必要である。

謝辞

本稿は、日本言語学会第 166 回大会ワークショップ「チュルク諸語の副動詞にまつわる諸問題 一節連結・副詞句・複雑述語」にて発表した内容に大きく加筆修正したものである (なお、本稿の第 I 部はワークショップにおける日高による趣旨説明と江畑冬生氏によるコメントに、第 II 部は日高発表「中央アジアのチュルク諸語における *V-(I)p bol-* [V-cvB be-]」に、それぞれ基づいている)。ワークショップの発表者をはじめとして、コメンテーターを務めてくださった江畑冬生氏、ワークショップの構想段階から筆者主宰のチュルク諸語勉強会にて意見をくださった網谷晃樹氏・大野秀治氏・島田一輝氏、ワークショップにてコメントをくださった皆様、各位に深く感謝申し上げる。本稿の調査にご協力いただいたインフォーマントの方々、本稿を査読してくださった匿名の二名の査読者にも深謝申し上げます。ただし、本稿における誤りは全て筆者に帰するものである。

なお、本研究は、日本学術振興会科研費 JP22J01538, JP22KJ1443 の助成を受けている。

略号一覧

-		接辞境界	NEG	negative	否定
=		接語境界	NPST	non-past	非過去
1		一人称	PASS	passive	受身
2		二人称	PAST	past	過去
3		三人称	PART	participle	形動詞
ACC	accusative	対格	PF	perfect	完了
ADJLZ	adjectivalizer	形容詞化	PFV	perfective	完結相
ADVLZ	adverbializer	副詞化	PL	plural	複数
AOR	aorist	アオリスト	PLN	place noun	地名
ASSERT	assertion	断定	PN	personal name	人名
AUX	auxiliary	補助動詞	POT	potential	可能
CNT	continuative	継続	POSS	possessive	所有
COND	conditional	条件	PROP	propriative	～持ちの
CONV	converb	副動詞	PRS	present	現在
CVB	converb	副動詞	PRES	present	現在
DAT	dative	与格	PST2		不明過去
DEM	demonstrative	指示詞	PST4		不定過去
FUT	future	未来	PTCP	participle	形動詞
EMPH	emphatic	強調	SEQ	sequential	継起
HONOR	honorific	尊敬	SG	singular	単数
IND	indicative	直說法	TRM	terminal	終結
INDIR	indirective	間接	VN	verbal noun	動名詞

INTRA intraterminal 間終結

参考文献

- アクマタリエワ ジャクシルク (2011) 「キルギス語—データ：「モダリティ」」『語学研究所論集』16: 203-209.
- アクマタリエワ ジャクシルク (2014) 「キルギス語の「持続」を表す補助動詞— *jat-*、*tur-*、*otur-*、*jür* を中心に—」東京外国語大学博士学位論文.
- アクマタリエワ ジャクシルク (2023) 「キルギス語の動詞 *jaa-* 「降る」に後続する補助動詞—21 種類の補助動詞の文法的意味と特徴—」『北方言語研究』13: 61-76.
- Bodrogligeti, András J. E. (2003) *An academic grammar of Modern Literary Uzbek*. München: Lincom Europa.
- Clark, Larry (1998) *Turkmen reference grammar*. Wiesbaden: Harrassowitz.
- Coupe, Alexander R. (2006) Converbs. Keith Brown (ed.) *Encyclopedia of languages and linguistics*. [2nd Edition]. vol.3, 145-152. Oxford: Elsevier
- Dmitriev, Nikolaj K. (1962) *Stroj tjurkskix jazykov*. [The structure of the Turkic languages] Moskva: Izd-vo vostočnoj lit-ry.
- 江畑冬生 (2023) 「サハ語とトゥバ語の副動詞の用法概観」『北東アジア諸言語の記述と対照』3: 109-128.
- Ebert, Karen H. (2008) Forms and functions of converbs. Karen H. Ebert, Johanna Mattissen, and Rafael Suter (eds.) *From Siberia to Ethiopia: Converbs from a cross-linguistic perspective*. 7-33. Zürich: Universität Zürich.
- Haspelmath, Martin (1995) The converb as a cross-linguistically valid category. In: Haspelmath and König (eds.) 1-56.
- Haspelmath, Martin and Ekkehard König (eds.) (1995) *Converbs in cross linguistic perspective*. Berlin/New York: Mouton.
- 日高晋介 (2013) 「ウズベク語：補遺データ (受動表現, ヴォイスとその周辺, モダリティ) (データ)」『語学研究所論集』18: 467-85.
- 日高晋介 (2023) 「中央アジアのチュルク諸語におけるモダリティ対照の試み」『言語の普遍性と個別性』14: 109-135.
- Hidaka Shinsuke (2023) Does *V-(i)b bo‘l-* express (im)possibility in Uzbek? *Proceedings of The 16th Seoul International Altaistic Conference*: 31-45.
- Ibrahim, Ablahat (1995) *Meaning and usage of compound verbs in modern Uighur and Uzbek*. Ph.D. dissertation, University of Washington.
- Johanson, Lars. (1995) On Turkic converb clauses. In: Haspelmath and König (eds.) 313-347.
- Johanson, Lars. (2021) *Turkic*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Juldašev, Axnef A. (1977) *Sootnošenie deepričastnyx i ličnyx form glagola v tjurkskix jazykax*. [The relation between converbal and personal verb forms in Turkic languages] Moskva: Izd-vo “Nauka”.

- 亀井孝・河野六郎・千野栄一 (1996) 「アルタイ型」『言語学大辞典 第6巻 術語編』28-29. 東京: 三省堂.
- 風間伸次郎 (2011) 「まえがき-テーマ企画: 特集「モダリティ」」『語学研究所論集』16: 29-55.
- 風間伸次郎 (2012) 「アルタイ型言語における準動詞と言いさしについて」『北方言語研究』2: 139-162.
- 風間伸次郎 (2022) 「トルクメン語: 特集補遺データ「他動性」「ヴォイスとその周辺」「受動表現」「アスペクト」「モダリティ」「情報構造の諸要素」「否定、形容詞と連体修飾複文」「所有・存在表現」」『語学研究所論集』26: 439-99.
- 風間伸次郎・新田志穂 (2023) 「現代ウイグル語: 特集補遺データ『「他動性」「ヴォイスとその周辺」「連用修飾複文」「受動表現」「アスペクト」「モダリティ」「情報構造と名詞述語文」「所有・存在表現」「否定、形容詞と連体修飾複文」「情報構造の諸要素」』『語学研究所論集』27: 551-614.
- 岸本秀樹・由本陽子 (2014) 「複雑述語研究の射程」岸本秀樹・由本陽子 (編)『複雑述語研究の現在』1-15. ひつじ書房.
- Muhamedowa, Raihan (2016) *Kazakh: A Comprehensive Grammar*. London, New York: Routledge.
- 中嶋善輝 (2015) 『簡明ウズベク語辞典』大阪: 大阪大学出版会.
- Nedjalkov, V. P. (1995) Some typological parameters of converbs. In: Haspelmath and König (eds) 97-136.
- Pellard, Thomas. (2012) Converbs and Their Desubordination in Ōgami Ryukyuan. *Gengo Kenkyu*. 142: 95-118.
- Ramstedt, G. J. (1903) *Über die Konjugation des Khalka-Mongolischen*. Helsingfors: Finnischen Litteraturgesellschaft.
- Rentzsch, Julian (2015) *Modality in the Turkic languages: form and meaning from a historical and comparative perspective*. Berlin: Klaus Schwarz Verlag.
- Schönig, Claus. (1987) (Un-)Möglichkeitsformen in den sogenannten Altaischen Sprachen [(Im-)possibility forms in the so-called Altaic languages]. *Materialia Turcica*. 13: 1-28.
- Shnitnikov, Boris, N. (1966) *Kazakh-English Dictionary*. London: Mouton.
- 高橋太郎 (2003) 『動詞九章』東京: ひつじ書房.
- Van der Auwera, Johan. (1998) Defining converbs. Leonid Kulikov and Heinz Vater (eds.) *Typology of verbal categories*. 273-282. Tübingen: Niemeyer.
- Van der Auwera, Johan and Vladimir A. Plungian. (1998) Modality's Semantic Map. *Linguistic Typology*. 2(1):79-124.
- Zaxarova, O. V. (1987) *Grammatika kirgizskogo literaturnogo jazyka. Chast' 1. Fonetika i morfologiya*. [The grammar of literary Kirghiz. Part 1. Phonetics and morphology.] Frunze: Ilim

Issues Related to Converb Use in Turkic Languages
and *V-(I)p bol-* [V-CVB be-] in the Turkic Languages of Central Asia

Shinsuke HIDAKA

(Japan Society for the Promotion of Science/Niigata University)

Keywords: converb, Central Asia, Turkic Languages, possibility, semantic map

This study is divided into two parts. In Part I, first, I discuss Ebata (2023), which shows a classification of converbs by comparing their cross-linguistic definitions. Ebata's (2023) classification is composed of three items: clause linkage, adverbial phrase, and part of complex predicate. Secondly, I explain the use of converbs in Turkic languages. Converbs take many forms and are used frequently in Turkic languages. Therefore, these languages provide rich ground for cross-linguistic analysis of converb use. Finally, I review the literature and provide direction for future research. In Part II, I discuss the meanings of *V-(I)p bol-* [V-CVB be-] in the Turkic languages of Central Asia based on previous research and the interview examinations I conducted with native speakers. I examine two opinions on the diachronic paths of modal meanings in *V-(I)p bol-*: Schönig (1987: 15) argued that modal meaning in *V-(I)p bol-* developed from actional meaning, while Rentzsch (2015: 95) stated that replacing purposive converb *V-GAI* in *V-GAI bol-* to consequential converb *-(I)p* led to modal meaning in *V-(I)p bol-*. Checking their meanings with the semantic map of possibility by Van der Auwera and Plungian (1998), I clarify that each language lacks participant-internal possibility. Lacking participant-internal possibility violates the principle that markers that can express two meanings on an identical path of the modal map can express any meaning between these two meanings. However, lacking participant-internal possibility does not contradict the semantic map if each actional meaning and modal meaning developed independently. Therefore, I support the opinion of Rentzsch (2015), not Schönig (1987).

(ひだか・しんすけ shidaka@human.niigata-u.ac.jp)